

BUDŌ

NEWS

今月のニュース



東海大（男子）が2年ぶり27度目の優勝

2024年度 全日本学生柔道優勝大会 男子73回・女子33回



東海大主将の中村（手前左）をOB・関係者・部員が囲んで校歌を歌う



男子決勝・副将戦＝天理大・神田（左）と東海大・新井の組手争い

2024年度全日本学生柔道優勝大会 男子7人制 東海大が2年ぶり27度目の優勝



男子決勝・副将戦＝東海大・新井（手前）が大内刈で技あり

男子決勝・先鋒戦＝東海大・東郷（右）が背負投で一本

2024年度全日本学生柔道優勝大会（主催Ⅱ全日本学生柔道連盟・毎日新聞社）が6月22・23日に日本武道館で行われ、体重無差別の男子7人制と女子一部（5人制）・二部（3人制）で優勝を争った。

男子決勝は、前回大会準優勝の東海大と前回大会3位の天理大の試合となり、2-1で東海大が2年ぶり27度目の優勝を飾った。前回大会優勝の国士舘大が4回戦で中央大に敗れる波乱が起こり、ベスト16で姿を消した。

女子一部の決勝は、前回大会優勝の環太平洋大と前回大会3位の東海大の対戦になり、5回引分が続き、代表戦までもつれた。東海大・横田ひかりが谷落で一本勝ちをした。

女子二部の決勝は、2連覇を目指す東海大九州と前回大会準優勝の広島大との前回大会と同じ顔合わせとなり、3-10で広島大が初めての優勝を手にした。

男子7人制 計62チーム

前回大会準優勝で27度目の優勝を目指す東海大は、準決勝まで着実に勝ち進んだ。準決勝では明治大と対戦。先鋒戦から三将戦まで引分が続き、残りは副将戦と大将戦の2試合。副将戦は明治大・千野根玄貴が技あり（小外刈）を決めて、東海大は0-1でリードされた。大将戦は、東京五輪金メダルのウルフ・アロン（パーク24）と100kg級パリ五輪代表を争った東海大・新井道大が登場。開始13秒、内股で一本を取り、東海大が決勝へと駒を進めた。



優勝が決まり涙する東海大・新井(左)と東郷(中央)

もう一方の準決勝のブロックは、前回大会3位の天理大と中央大。前回大会優勝の国士舘大を4回戦で破り勢いに乗る中央大に天理大は苦戦を強いられたが、1-0で決勝に進んだ。決勝は東海大と天理大との15年ぶりの戦いとなった。

◇決勝

東海大 2-1 天理大

先鋒 東郷丈児○背負投 本田祥万次鋒 高田遼真 引分 石田幸伸五将 天野開斗 引分 平見 陸中堅 長濱佑飛 小外刈○鈴木太陽三将 中村雄太 引分 向井球真副将 新井道大○合技 神田雄志大将 石本慎太郎 引分 新田朋哉

先鋒戦は無差別の試合であるが、共に81kg級の選手が登場。開始33秒、東海大・東郷丈児が鮮やかな背負投で一本を決めた。次鋒・五将戦は両者決め手を欠き、引分となった。

中堅戦は、東海大の長濱佑飛が172cm・90kg。対する天理大の鈴木太陽は182cm・110kgで体格差のある試合となった。両者積極的に攻め合う中、鈴木が組み際に小外刈をしかけ、体

を浴びせて一本勝ち。1-1の同点となり、観客の熱気は一段と上がる。

大事な三将戦は、東海大主将の村雄太と天理大・向井球真との戦いになった。互角の試合内容で、向井は指導二つを受けたが、引分。

続く副将戦は、今大会全て一本勝ちの東海大・新井と天理大主将の神田雄志の試合となった。新井は積極的に攻め、試合前半に大内刈を決めてリードを奪った。神田も意地を見て、捨身小内や大外刈を繰り返し出すが、新井が横四方固を決めて合技で一本となった。

大将戦、天理大は、最低でも一本で勝たなければ内容負けとなる重要な試合。互いに慎重な試合展開をみせ、試合時間残り1分33秒で両者とも指導二つとなる。東海大・石本慎太郎は捌きながら自分の柔道を行い、引分。東海大の2年ぶり27度目の優勝が決まった。



優勝II東海大・上水研一朗監督



「連覇が止まって、非常に長く苦しい1年間でした。(来年の連覇について)勝つことが非常に難しいと重々承知している。また来年もこの舞台で目いっぱい戦って、優勝を勝ち取りたいと思います」

優勝II東海大・新井道大選手



「去年負けた光景がずっと頭の中に残っていました。仲間たちや尊敬する先輩方に支えられ、恵まれています」

女子一部 計38チーム

女子一部（5人制）は、先鋒・次鋒は57kg以下、中堅・副将は70kg以下、大将は無差別で行われる。

準決勝では2年ぶり8度目の優勝を目指す東海大と初優勝を狙う明治国際医療大が顔を合わせた。先鋒・次鋒戦は引分。中堅戦では、今大会一本勝ちを2回決めている東海大・

本田万結が技あり（小外刈）を決めて勝利。東海大は勢いそのまま、大将戦も勝利を収めて2-0で決勝戦へ。

もう一方の準決勝のブロックは、

前回大会優勝の環太平洋大と帝京大。先鋒戦、帝京大・大久保藍が技あり（肩車）を決めて勝利。中堅戦では、環太平洋大・星野七虹が試合中盤に小外刈で一本を決めた。副将



女子決勝・代表戦＝東海大・横田（左）が谷落で一本勝ち

戦は環太平洋大・石岡来望が合技で一本勝ちを決めた。この時点で、環太平洋大は相手に一本勝ちを取られなくても、内容差で勝つため、決勝に進むことが決まった。

◇決勝

東海大 0-0 環太平洋大

先鋒 横田ひかり 引分 伊藤南風
 次鋒 川田歩実 引分 荒川清楓
 中堅 本田万結 引分 前田凜
 副将 矢澤愛理 引分 石岡来望
 大将 池田紅 引分 椋木美希

◇代表戦

横田ひかり○谷落 伊藤南風

両者互角の戦いをみせ、先鋒戦から大将戦まで、いずれも引分に終わった。審判規定に則り、「引き分けの階級の中から抽選で代表選手を選出し、ゴールデンスコアにより代表戦を行う」ことになり、先鋒戦の東海大・横田と環太平洋大・伊藤南風の代表戦になった。

両者は佐久長聖高校の出身で同級生。因縁の対決となった。

身長では10cm上回っている東海大・横田。激しい攻防が続き、開始1分10秒に相手が仕掛けてきたところ



女子一部（5人制）優勝＝東海大学

を、横田が「一発、はまれ」と気持ちをこめ、谷落を決めた。この瞬間、2年ぶり8度目の優勝を手にし、横田の目には涙が浮かんだ。

優勝Ⅱ東海大・塚田真希監督

「学生と共に日本一を目指したいという気持ちで、日々の練習を頑張って取り組んで、この大会に臨みました。代表戦になって横田が落ち着いて、展開できたところが大きな勝因だったと思います」

大人も子どもも読んで読んで楽しく、ためになる武道教養マンガ。

マンガ・武道のすすめ

漫画家・別府大学教授
田代しんたろう 著

柔道は、大澤慶司、長谷川博之、腹巻宏一
吉村和郎、山内直人の5氏を掲載！

B5判・236頁



お問い合わせ・ご注文は
日本武道館出版広報課まで
TEL 03-3216-5147



②女子決勝・中堅戦＝
広島大・今岡（上）が大外刈で一本



①女子決勝・先鋒戦＝広島大・安枝（右）が出足払で技あり

女子二部 計23チーム

女子二部（3人制）は体重無差別で争われる。

準決勝は前回大会準優勝の広島大と姫路獨協大の試合となった。先鋒戦、広島大・安枝風香が崩袈裟固で一本勝ち。中堅戦は引分、勝負が決まる大將戦は、広島大・城美月が支釣込足で一本。2-0で広島大が初優勝を懸けて決勝へ進んだ。

もう一方のブロック、前回大会優勝の東海大九州と東日本国際大との準決勝は、東海大九州の中堅・大將が技を決めて、2-0で勝利を収めた。決勝は前回大会と同じ対戦となった。

◆決勝

広島大 3-0 東海大九州

先鋒 安枝風香○出足払 鎌田晶妃
中堅 今岡そら○大外刈 増田美羽
大將 城 美月○縦四方固 入江桃子

先鋒戦、前回大会で優秀選手に選ばれた広島大・安枝が技あり（出足払）で勝利して勢いをつかった。中堅戦、広島大・今岡そらは相手に技あり（支釣込足）を取られるが、試合時間残り24秒に大外刈で一本勝ちして、初優勝の栄冠を手にした。大將戦でも広島大が勝利し、3-0で去年の雪辱を果たした。

優勝Ⅱ広島大・出口達也監督
「去年決勝で負けたチームとまた決勝で戦うことができて、リベンジが



女子二部（3人制）優勝＝広島大学

できて嬉しいですよ。（この1年間の稽古は）特別な対策はせずに自力をつけてきました。まだまだ強くなる可能性を持っている選手たちなので、今日よりも強くなっていくことを目指していきたいと思えます」



決勝Ⅱ中野（左）対原沢

中野寛太（旭化成）が初優勝

令和6年全日本柔道選手権大会

令和6年全日本柔道選手権大会（主催Ⅱ講道館、全日本柔道連盟）が4月29日、日本武道館で開催された。大会には全国10地区の予選を通過した40名に、前回大会の優勝者・準優勝者の2名を加えた計42名の選手たちが参加し、柔道無差別級日本一の座を争った。

今大会の決勝は、中野寛太（近畿・旭化成）と原沢久喜（中国・長府工業）の対決。中野が判定で原沢を下し、初の日本一に輝いた。

本大会は、国際柔道連盟試合審判規程および全日本柔道選手権大会申し合わせ事項に基づいて行われた。

試合時間は、トーナメント1回戦から準決勝までは5分間、決勝は8分間。時間内に勝敗が決しない場合は主審（1名）および副審（2名）による旗判定によって勝敗を決した。

ベスト4に進出したのは前回大会優勝の王子谷剛志（推薦・旭化成）、3度目の優勝がかかる原沢久喜、ともに初優勝を狙う中野寛太、グリーンカラニ海斗（東京・パーク24）の4名。

準決勝

①中野 ○(小外刈) 王子谷

立ち上がりは慎重に試合を進める



準決勝①=中野(上)が小外刈で一本を奪う



準決勝②=原沢(奥)の崩上四方固

両者。ケンカ四つから王子谷が仕掛ける出ばなを中野が捉え、小外刈で一本勝ち。わずかに試合時間36秒で中野が前年度優勝の王子谷を下した。

②原沢 ○(合技) グリーン

試合序盤、グリーンが内股を攻めるも原沢が耐えてカウンターの谷落で技あり。中盤戦、巻き返しを狙うグリーンを崩上四方固で押さえ込み再び技あり。原沢が圧倒的な力を見せ、決勝に進出した。

決勝

中野 ○(判定) 原沢

両者ともに相手の固い防御に攻めあぐね、中盤戦には両者とも標準的でない組手と見なされ反則を一つずつ付与される。終盤戦、場外に出る反則を付与され、累計二つの反則をもつ原沢が猛攻を仕掛けるが、中野も投げ合いに応じる。試合時間8分が終了し、激戦となった決勝の行く末は判定に委ねられた。結果は、接戦を制した中野が2-1で念願の初優勝を手にした。

●優勝者インタビュー 師とともに掴んだ優勝



このタイトルは、自分の中で何があっても獲りたいタイトルでした。なので初めて持つ優勝杯に

は、重さ以上の重みもありました。

4月の選抜大会で負けてから、母校・天理大学で穴井隆将先生に1週間付きっきりで稽古をつけてもらいました。今までで一番キツかった稽古でしたが、今日はその稽古の経験が自信になっていたので、穴井先生、また相手をしてくれた学生のみんなに感謝しています。

今年のパリ五輪が終われば、次のロサンゼルス五輪の選考が始まりますので、しっかりと戦っていきたいと思います。



観客で埋まった日本武道館の大道場



中村真一全日本柔道連盟会長から優勝杯を受け取る中野(左)

- 大会結果
- 優勝 中野 寛太(旭化成)
 - 準優勝 原沢 久喜(長府工業)
 - 3位 王子谷剛志(旭化成)、グリーンカラニ海斗(パーク24)
 - 5位 西尾徹(大阪府警)、押領司龍星(京葉ガス)、佐藤和哉(日本製鉄)、影浦心(日本中央競馬会)